

---

# World in The World ~ お嬢様お手をどうぞ ~

琴藍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

World in The World（お嬢様お手をどうぞ）

### 【コード】

N1921Z

### 【作者名】

琴藍

### 【あらすじ】

妖たちのアイドル譲流（通称オジョー）と、その相棒の密臈みつらぎさん【と、時々仲間たち】の痛快世直しコメディ！……の、予定でござります。

ブローグ？

真昼の太陽に照らされたアスファルトがゆらゆらと揺らめいている。

立ち上った陽炎が人々を呑み込んでしまったかのように、辺りに人影はない。

「もー……耳痛いわぁ」

盛大な蝉時雨に眉を寄せて譲流は呟いた。

「譲流……。こんな日でも大学行かんとダメ……？」

うっかり口走ってから譲流の視線に気付く。

「大学？行かんとダメ？……だ・れ・の補習だ、誰のっ！」

「お、俺……？」

「疑問符付けんな！テメエのだろうがよ！」

ジリジリと詰め寄られむんずと掴まれた胸ぐらに、流れる汗が冷や汗に変わる。

(やばい！讓流怒らせたーっ)

世間は夏休み。それを満喫出来ないのは何故か？……全ては試験前に遊び惚けていた自分が悪いのだ、と密臈は二、三発殴られる覚悟を決めた。

その時だった。

密臈の視界の端に、人影がフラリと現れて消えた。

(消えた……？違うー！？)

「た、たたっ倒れた！」

「まだ殴ってないわ!」

「俺じゃなくて!ーうーしーろー!」

訝しげに後ろを振り向き譲流の手は、密臙を逃がさぬように握力を強める。距離を保とうとする密臙は、必然的に重心を後ろにかけた。

きつと、たぶん……それがいけなかったのだ。

「……やばいじゃん、あれ」

眩きと共に密臙の胸ぐらがすつと軽くなる。

「うえ!?!……」

支えを失った密臙の体は重力の理によって落下した。ハロー、鈍痛……。

痛むお尻を擦りながら悶える密臙を後目に、譲流は倒れた人影に走り寄る。

「っ！？密臙さん、水！早くみーずーっ！」

「水！？ちよっ、コ、コンビニー！」

譲流の切羽詰まった声に、痛みを押しながら密臙は走り出した。いつもよりスマートに走れないのは大目に見て欲しい。

「すぐ水あげるからね。んー……かなり透けちゃってるねえ」

倒れた体を日陰に運び、薄く緑に透けた腕に気付く。  
普通の人では有り得ない肌色にも譲流は動じなかった。

「譲流、はいつ、水！」

近くのコンビニまで走った密臙が肩を上下させながら戻って来る。

「密臙さん遅い。息切れカッコ悪いし」

文句を言いながらも、つると丸みを帯びたペットボトルを受け取り蓋を開けた。そして、躊躇なく中身を倒れた人の頭にぶちまける。

「……っぴぎゃー……!」

弾ける刺激に、辺りには悲痛な雄叫びが木霊した。

？

「信じらんねえ……」

「……」めん、なさい」

静かに怒りを爆発させる讓流の手には空になったペットボトル。

足元には、枯れたような緑の皮膚を纏い、硬い甲羅を背負った『河童』が。

「わざとじゃないの！ゆずちゃんの分も買ったから、渡し間違えたの！」

讓流の左手（必殺利き手ビンタ）を警戒しつつ、慌てて袋からもう一本のペットボトルを出す。

「……ツチ。河童の皿は敏感だって言ったじゃん」

舌打ちを隠しもせずに北アルプスの天然水を引ったくり、炭酸の刺激で完全に伸びてしまった河童の頭へと注げば、しわしわの肌に

しっとりとした分泌液が滲む。

「……譲流だって気付かなかったのにさ」

「密臈さん、何か言った？」

につこり音がする程の綺麗な笑みを浮かべ、密臈を振り返った譲流の額にははつきりと青筋が浮かんでいた。

「い、いいえ！言ってますんっ」

慌てて否定するが、もう遅い。

「……もう知らん。一人で大学行きやがれ！密臈さんのばーかっ  
！」

密臈の右頬が乾いた破裂音を立てた。譲流はさっさと踵を返し、来た道に戻って行く。

「つゆずちゃん酷い！……って、河童どーすんの！？」

残された密臈は、痛む頬を庇いながら傍らの河童を見下ろしてい

た。

出会い？

「うー……またやっちゃった」

さらさらした栗毛が幾分か俯いて見える。黒縁のだて眼鏡にかか  
る前髪にイライラしつつ、まだ感触の残る左の掌を見つめ、篠田譲  
流は溜め息をこぼした。

（あんなの……ただの八つ当たりだ）

ちゃんと分かっている。しっかりと表示を確認しなかった自分に  
も非があることは。

ただどそれをあの場で認められる程、譲流は大人ではなかった。

「……ごめん、密隴さん」

とぼとぼと帰路を辿りながら置いてきてしまった相棒へと呟く。  
思いっきり叩いてしまったことへの謝罪と、河童の処置を放り出し  
て来てしまったことへの罪悪感で譲流の気持ちは更に重くなった。

「……………」

「っ!?!?~~~~~っう、あ!?!?」

耳許で音がしたと同時に大きな何かに左肩を掴まれ、讓流の口から声にならない悲鳴が漏れる。

「……………ええ!?!?大丈夫ですか?」

慌てて振り返ると、両手をホルドアップさせた青年が目を瞬かせていた。

「っだ、誰……………?てか、手えでかつ……………」

「あ、ごめんなさい。僕、田沼って言いますけど……………」

篠原さん、ですよね?と印象的な情けない笑顔で確認される。

(これは、もしかして……………?)

「えーと……………」お嬢様、お手をどうぞ『?」

「……ああ、うん。話聞くよ」

半信半疑な顔を隠せない田沼に軽く頷きながら、譲流は近くのカフェを頭のなかでリストアップした。

？

「ふーん…同じ大学なんだ。学部違つと全然分かんないよね」

空調が効いたカフェの奥まった席で、譲流は田沼と向かい合つていた。

「あ、でも篠田さんたちは結構有名だよね」

「あー………すごく不本意だけど。ヤラカシさんがいるから？」

どうにもおつちよこちよいな相棒を思い浮かべ、苦笑いが漏れる。

(そういえば河童………どうしたかな)

「それで………相談、なんだけど」

アイスティをくりりとかき混ぜる田沼の顔に、ふと影が射した。

「友達、秋津っていうんだけど……そいつが行方不明なんだ」

「行方不明？」

「もう二週間も連絡取れなくて。最後に『篠田さんによろしく』  
って」

秋津という名前には聞き覚えがあった。

「秋津、音弥……？首席で入学した？」

名前だけは知っている。しかし面識は全くなかった。  
だからこそ、先程田沼があのキーワードを知っていたことが気にかかる。

「田沼はさ、誰に聞いたの？その……あの言葉」

「言葉？……ああ、あれ？あれも音弥が前に話してたのを覚えて  
て」

あのキーワードは、妖やそれに連なる者が助けを必要とする時、  
正しい用法をすることで効果を発揮するのだ。

(今がその時、かな)

話してみても、田沼は信用に足る人物だと讓流の直感が告げる。

「やれるだけのことはするよ。よろしくね、田沼」

氷が溶けて薄くなったオレンジジュースを喉に流し込んで、讓流は田沼と連絡先を交換するために携帯を操作した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1921z/>

---

World in The World ~お嬢様お手をどうぞ~

2011年12月7日00時55分発行